

『今鏡』から『発心集』へ

— その受容の実態と方法 —

山口眞琴

一、はじめに

『発心集』説話の伝承関係を探る上で、『今鏡』は『宝物集』、『古事談』などととも重要な文献といえる。特に、現存本『発心集』（八卷本）の巻二の比叡天台関係の話、巻五の平安朝貴族説話において、『今鏡』との伝承関係が認められるようである。

かつて、山内益次郎氏は、『今鏡』から伝承されたと思われる『発心集』の話は八話であると言及された。（巻二―第15、16話、巻五―第53、54、55、56、57話、巻六―第70話）

また、藤島秀隆氏は、『今鏡』と『発心集』との関連についての御論稿において、関係説話を検討し、第15、16、53、54話に直接の伝承関係を認め、第56、57、70話も、その可能性の強いことを指摘しておられる。さらに、氏は『今鏡』の作者として有力視されている藤原為経（寂超）を想定した上で、『発心集』の編者・鴨長明が多くの歌会に出席していた事実（『無名抄』から窺える。）に注目して、両書の伝承経路についても論及しておられる。それによると、長明は、歌人であり為経の子である隆信と親交があったであろうし、為経との交流もあったと推察され、為経の所持していた資料（『今鏡』など）を、『発心集』執筆にあたって構想の中に組み入れたた

であろう、と述べられておられる。

実際、長明が『今鏡』およびその資料を入手していたと考えることは、あながち無理ではなからう。長明の『無名抄』の中にも、『今鏡』からの伝承と思われる話があり、長明と『今鏡』とを結び付ける有力な証拠となるであろう。『発心集』のどの部分までが長明の編纂によるものか、なお問題は残るが、『今鏡』との関係説話はすべて巻六以前にあるので、ひとまず長明一人の編纂によるものとして、考察を進めてみたい。

次に、『今鏡』と『発心集』との関係説話の一覧表を掲げる。

○ ○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
〔発心集〕	〔今鏡〕		
① 卷二第15話	昔語九「真の道」		
② 卷二第16話	昔語九「真の道」		
③ 卷五第49話	打聞十「敷島の打聞」		
④ 卷五第53話	昔語九「真の道」		
⑤ 卷五第54話	昔語九「真の道」		
⑥ 卷五第55話	すべらぎの上「望月」藤波の中五「昔の衣」		
⑦ 卷五第56話	藤波の中五「昔の衣」		
⑧ 卷五第57話	御子たち八「月の隠るゝ山のは」		
⑨ 卷六第70話	昔語九「賢き道々」		

◎印は同文的關係、○印は類似關係が認められるもの

本稿では、『発心集』が『今鏡』所收の話をどのように伝承し取り入れていったのか、あるいは、『今鏡』からの受容はいかほどであったのか、という点に主眼を置き、関係説話の検討を通して、その受容の実態と方法を明らかにしていきたい。

なお、『発心集』引用本文と説話番号は「校註鴨長明全集」、『今鏡』引用本文は『日本古典全書』によった。

二、説話配列における受容 (一)

——『今鏡』昔語「真の道」から『発心集』へ——

既に触れたように、『今鏡』と関連する説話が『発心集』の巻二、巻五に集中して収められている(第70話のみ巻六)。巻二には、『方丈記』に大きな影響を与えたといわれる『池亭記』の作者・慶滋保胤(寂心)の話と、長明が深く傾倒した『往生要集』の著者・源信に師事したところの大江定基(寂照)の話とが連続して収録されている。どちらも長明と関わりがある人物で、収録の事実自体に注目すべきものがある。文章道に秀で、かつ現世を厭いて出家した二人に、長明が心寄せ敬慕していたと見ることは、認められてよいであろう。巻五には、公経、統理、顕基、成信・重家、高光、有仁という貴族の説話が連続して収められている。この『発心集』の貴族説話は、長明の意図的な編纂によるものと考えられ、特に第54話から第57話にかけては、現世否定、貴位否定という思想によって貫かれているようだ。以上紹介した『発心集』の説話配列における『今鏡』からの受容について検討を加えてみたい。

『今鏡』昔語第九「真の道」には、次に示す五個の話が存在する。

1 大内記の聖保胤(第15話)

2 三河の聖定基(第16話)

3 少納言統理(第54話)

4 公経(第53話)

5 大外記定俊、信俊父子

下に対応する『発心集』説話の所在を付したが、比較対照の結果、部分的に記事の出入はあるものの、いずれも類似度は高く同文的關係にある。

まず、保胤、定基説話が連続している点で両書は共通している。

保胤、定基の順で話を収録していることでは、『統本朝往生伝』も同じであるが、『統本朝往生伝』には両話の間に短い為基(定基の兄)の往生譚が入っており、保胤の話は『今鏡』『発心集』と内容的にほとんど重ならない。また、両書と同趣の類話を収めている『今昔物語集』は、定基、保胤の順序であり逆の配列になっている。よって現存文献中、『発心集』よりも成立が早く、しかも類話關係にあるのは『今鏡』だけとなる。おそらく『今鏡』の両話を一度に伝承し採録したのであり、説話配列も『今鏡』に拠ったと考えられる。

次に、統理、公経説話について見ると、右表からも明らかのように、『発心集』の配列は『今鏡』の逆である。巻二の例からすれば不自然であり、両人の没年からも『今鏡』の配列順が正しいことになる(統理は正暦六年へ九九五、公経は康和元年へ一〇九九)。あえて『発心集』が『今鏡』に従わなかったのには、何らかの理由があったと予想される。広田哲通氏も少し指摘されているように、それは話の性格に関わっていると思われる。第53話は、公経が河内

国の守となり古寺などの修理を行なったところ、ある寺の仏坐の下に、「沙門公経」という名で「こん世に此の国の守と成りて、此の寺を修理せん」と書かれた願文を発見するという話である。つまり前世の因縁による善果（寺の修理）が中心となっている。そこで直前の第52話を見ると、前世の悪業によって牛になるという設定があり、第53話とは因果譚という点で共通し、悪果・善果ということでも対照的対応を示している。二話一対の方法による配列と見てよいであろう。一方、第54話は統理の道心譚であり、出家してもなお現世への執着を断きれない苦惱が主題となっていて、明らかに第53話とは性格、主題を異にしている。第54話はむしろ第55の顕基説話と対応しており、ともに貴族の現世に対する執着、肉親への愛執に焦点が当てられている。そして、深い道心を描いている第56・57話へと展開するのである。従って第53の公経説話は、前話とのつながりからして当然の配列であり、公経の話（因果譚）とは異なる統理の話は、第57話まで続く貴族道心譚のさがけとして配されたと考えられ、「今鏡」の配列を編者が意識的に改めたと思いたい。

以上、「今鏡」昔語第九「真の道」からの「発心集」の受容を、説話配列という点に絞って検討してみた。最後に素朴な疑問として残る問題がある。それは五話のうち四話まで採録しながら、残る一話をなぜ採らなかつたのかということである。長明が「今鏡」を入手していた可能性は強いし、少なくともこの昔語の資料は見ていたようである。そうなると、伝承の際に、説話の取捨が行なわれたことになる。その取捨の事情について、少し私見を述べてみたい。

『今鏡』所収の5定俊の話の梗概は以下のようである。定俊が越

中守になった時、国人が自分を軽蔑するので怪しく思っていたところ、ある夜、自分は前世においてこの国の盲目の持経者であった。人が蔑視するのは、そのなごりだ。そのまた前世は牛であったが、法華経を連んだ因縁で持経者に生まれ変わった。今、色が黒いのは前々世のなごりである」という夢を見た。その後、定俊は前世のなごりからか、出家して法師になったという。この話のあとに付載されている子信俊の話は短いので省略する。

前世因縁譚という点で、前の公経の話と共通するが、公経の善因善果に比べて、本話の因果関係は複雑であり、明確さに欠けるようだ。牛から持経者に転生したところは善因によるが、定俊の色黒さや出家は、前世あるいは前々世の「なごり」として扱われている。話の中心である定俊蔑視という現世での悪い現象も、前世における盲目の持経者が、国人から冷遇されたためと解釈できるが、それとても明確な悪因ではなく、やはり「なごり」「影響」として受け取れ、悪因悪果といった強い因果関係は浮んでこない。前世因縁譚としては希薄な主題性が、「発心集」編者をして、本話の採取を断念させたのではなからうか。話の主題による配列をめざす編者にとって、公経の話は第52話の悪因悪果と対応するものとして適当であったが、定俊説話は因果譚としての主題性が乏しく処理しきれずにおつたのではないか。なお臆測の域を出ないが、「今鏡」昔語「真の道」所収話の取捨事情について試案を提出してみた。

三、説話配列における受容 (二)

——『今鏡』藤波の中「昔の衣」から『発心集』へ——

『今鏡』藤波の中「苔の衣」には、多くの貴族子弟が名を連ね、各人の出家通世にまつわる記事が収められている。その中には、名前のみ記している例もあり、具体的に発心の動機や通世地を記している場合もある。今、前者を除いた具体的記述の見える人物を列挙してみると、次のようになる。

- | | | |
|------------|---------|------------|
| 1、雅教(2) | 2、公房(3) | 3、僧正遍昭(2) |
| 4、顕基(2) | 5、高光(2) | 6、時叙(1) |
| 7、成信・重家(2) | 8、成房(1) | 9、義懐・維成(1) |

()の数字は『日本古典全書』本の行数

一見してわかるように、「苔の衣」には7の成信・重家の出家譚以外に話としてのまとまりをもつものはなく、他はすべて注記程度にすぎない。つまり、この「苔の衣」の章段から直接採録できるのは、成信・重家の話しかないのである。それを『発心集』は改変の手を入れているが、書承している可能性が強い。

『発心集』巻五第55話には、先述した統理の道心譚に続いて中納言顕基説話がある。これは著名な話であつたらしく、多種の文献に収められている。藤島氏によると、本話は「純本朝往生伝」および「古事談」から直接書承したとされる。また第56の「成信・重家同時出家事」説話は、『今鏡』を主、「古事談」を副とした両書からの直接書承であろうといわれる。第57の花園左府有仁の話は大きく二つに分けられ、後半部分が『今鏡』と近似しており、直接書承の可能性が強い。結局、『今鏡』からの説話伝承の可能性は第56・57話とに見出せる。また、『今鏡』藤波の中「苔の衣」からの伝承説話は第56話だけとなるが、説話配列の面から、その受容のあり方を

改めて検討してみたい。

『今鏡』「苔の衣」の登場人物一覧を再度見ると、第55、56話に登場する顕基、高光の名が4、5にある。『今鏡』の顕基の記事は次のようになっている。

「入道中納言の後一條の御忌に、帝を忿ひ奉りて、世を背きて、深き山に住み給ひひけむにも、おくれぬ哀れさこそ聞き給ふめれ。」

これは『発心集』第55話における顕基の出家譚の梗概にあたる。一方、高光の記事は『発心集』の話とは別種のものである。『発心集』では、成信・重家のあとに高光の話が付載されており、『今鏡』の配列順と比較すると逆になっている。この人物配列の類似は単なる偶然であろうか。やや強引すぎるかもしれないが、次のような推定を試みてみたい。

『発心集』編者は、『今鏡』「苔の衣」から成信・重家の出家譚を直接伝承し、その際、わずかながら出家の記事が見える顕基に眼をつけ、それを手がかりとして他の文献から話を集めて収録し、同様に、顕基のあとに登場する高光の別種の話をも第56話の末尾に収めた。つまり、『今鏡』を説話の配列、採取の手引きとして活用し、『今鏡』に登場する人物の話で編纂意図にかなったものは、そのまま収録し、それ以外は他の文献に依拠したとする見方である。なお、『今鏡』において高光の次にある6時叙(少将聖)に関する話は、『発心集』巻六第72「室泊遊若吟鄭曲結縁上人事」に収められている。

以上のような推定が成り立てば、『今鏡』「苔の衣」からの受容

は多大であり、『発心集』巻五の一連の貴族説話の配列構成は、すべて『今鏡』に拠つたこととなる。

『発心集』巻五における『今鏡』からの多大な受容を、さらに後押してくれるのが第49話であろう。第49話に登場する男は、『朝夕帝に仕うまつる』弁という地位にある。本話は『今昔物語集』巻三十一第7と『今鏡』打聞第十所収の話と関連がある。三話とも、男から見捨てられた女が、男と再会し法華経を説誦しつつ急死する点で共通しているが、話の性格はそれぞれ異なる。詳細は略すが、『今鏡』には次のような他の二書にない末尾叙述が見られる。

「当時弁なりける人なれば、さすがえ籠らで、土に降りてとかくの事泣く／＼沙汰して、しばしは山里に隠れ居りければ、世を背きぬるなど聞えけれど、さすが隠れもはてで、出で仕へければ、かへるの弁とぞいひける。」(傍点山口、以下同じ)

女が死んでからの男の後日譚である。この叙述があるために、『今鏡』の話は「かへるの弁」というあだ名の由来譚としての性格を帯びている。

これに対して『発心集』では、女の往生譚という性格が強く、男の後日譚は付さずに、次のような評論部を設けている。

「此の男の心のいかばかりなりけむ。男とはなにがしの弁とかや、聞きかど、名はわすれにけり。」

この叙述に従えば、本話は聞書によつたことになる。「なにがしの弁」とは、『今鏡』にあるような「かへるの弁」を指しているのであるが、ほんとうに『今鏡』の話を見ていなかったのであらうか。見て知りつつも、忘れたというポーズを取つたのではないかと

疑つてみたい。

その疑念を裏付けてくれる同様の事象が『発心集』の他の個所に見出せる。たとえば、巻一冒頭話「玄徽僧都遁世逐電事」には、

「此の事は物語にも書き待るとなむ。人のほのほの語りしばかりを書きけるなり。」

とある。本話は「古事談」とほとんど一致しており、直接書承した可能性が強い。『古事談』を「物語」と表現し、聞書風を装つたと思われる。また、巻四第38話も「法華験記」上印の話と、ほぼ同一の行文であり記事の出入も全くない。従つて、直接の書承関係が指摘できそうであるが、『発心集』末尾には、

「記として、彼此にしろし置きける文あれど、事しげければ、覚ゆるばかりを書きたるなり。」

とあつて、覚書を主張している。しかし両書の同文的関係からして、これも疑わしい。

他に、『今鏡』打聞第十から伝承した話が『無名抄』に収められていることから、先の予想が成り立つのではなからうか。第49話も『今鏡』から話の大体を採り、独自の主題意識に沿つて大幅に改変、潤色したと考へたい。巻五の貴族説話は『今鏡』を拠り所として配列され、その受容の実態は予想以上に大きな広がりをもつていふと思われる。

四 伝承説話の検討 (一)

—— 説話の構成について ——

ここで検討する説話の構成とは、それぞれの話の構成を指し、一

説話を形成する個々の話は、便宜的に「話柄」と呼ぶことにする。扱う説話は「今鏡」から直接書承したと思われるものに限り、その伝承説話の検討を通して、『発心集』説話の構成のあり方、およびそれがどのような編纂意図に基づいているのかを探ってみたい。まず一例として『発心集』巻二第15話「内記入道寂心事」を取り扱う。本話はいたい次の七つの話柄より構成されている。

- I、参内途上、石帯を失い泣いている女に自分の帯を与えた事
- II、中務宮に漢詩文を教授する折に、念仏を唱えた事
- III、その宮へ参上の途中、卒都婆のある毎に、礼拝した事
- IV、馬の道草にまかせていると、舎人が馬を打つので憐んで泣いた事

- V、『池亭記』の「身は朝にありて、心は隠にあり」の文の事
- VI、出家後、横川で増賀上人から教えを受け感泣した事
- VII、往生時の請文などの事

このうち、『今鏡』昔話にはIII IVを除いた五つの話柄が収められている。その構成順序は『発心集』と異なり、IIがVの後に位置し、IV II VI VIIとなっている。

両話とともに保胤の在俗時と出家後との話柄から構成されていて、特に在俗時の話柄は、『発心集』の冒頭にある「心一つに仏道を望み願うて、ことふれて哀み深くなんありける。」という姿を描いている。即ち、「道心」と「慈愛」とに満ちた保胤である。『発心集』の各話柄では、IVが慈愛、II IIIが道心となろう。『今鏡』がそのうちのI IIしか収めていないのに対して、『発心集』はIII IVを補充し、より鮮明に保胤の姿を浮かび上がらせているといえる。

さらに、在俗時の話柄の末尾に、「かや、うの心なりければ、池亭記とて、書きおきたる文にも「身は朝にありて、心は隠にあり」とぞ侍るなる。」(傍点部分は「今鏡」にない叙述) という一文を位置させている点に注目したい。I III IVの話柄はいずれも参内、宮参上途中のでき事であり、IIも宮家におけるエピソードである。殊に、III IVの保胤の姿は、参内を拒否して病人を憐んだ教実(巻四第41話)と共通しており、「身は朝にありて、心は隠にあり」という思想が、最も如実に具現した例であろう。その話柄を採録し、Vにおいて保胤の思想の反映として、それらを結論付けた構成の手法は見事であるといえる。

なお、『今鏡』以外からの伝承と思われるIII IVの話柄は、『今昔物語集』巻十九第3に見出される。そこでは、保胤出家後の事として登場し、行先も「六条院」であり異なる。『発心集』は在俗時の事とするために、IIの「中務の宮」と脈絡を付け、「ある時、かの宮より馬を給はせたりければ、」として改変の手を入れたと思われる。説話構成の工夫の跡が窺えるようである。

同じく構成面で大きな相違を見ている例として、成信・重家の出家譚がある。『発心集』第56話の構成を示すと次のようになる。

- I、成信・重家が同時に発心した事
- II、重家の発心の理由
- III、成信の発心の理由
- IV、二人が三井寺で会おうと約束し、成信一人が出家した事
- V、重家が自ら元結を切つて、翌朝三井寺へやって来た事
- VI、二人の出家に対して慶祥阿闍梨が感嘆した事

Ⅳ、重家の暇乞いの事

「古事談」からの伝承はⅣの前半部とⅤに認められる。「今鏡」には、ⅤⅥがなくⅣⅤⅥⅦの順に構成されている。話の構成面での大きな相違は、「今鏡」が「兩人の出家の状況」→「発心の理由」という展開を示しているのに対して、「発心集」では逆に「発心の理由」→「出家の状況」という時間経過に即して展開させている点である。また、「今鏡」では、一応二つの発心理由を掲げてはいるが、成信・重家の区別がなされていない。これに対して「発心集」は、

「志は一つなれど、発心の起りは、異なりけり。少将は・・・」
〈中略〉。中将は・・・」

として明確に兩人の理由を区分している。よって「今鏡」に比して、かなり整った構成であり、行成の夢の事なども挿入し雑然とした記事の集成である。「今鏡」の話を、一個の発心出家譚として構成しなおしたと考えられる。その際、「古事談」からの補充がなされたことは、Ⅳの話柄が「今鏡」と「古事談」とを合せた体裁になっていることからわかる。

「発心集」本話の主題は、末尾評論にある「人のかしこきにつけても、愚かなるにつけても、実の道を願ふたよりとなりけんこそ、昔にあらまほしく侍れ」という叙述からも推察されるように、菩提心の契機の問題にある。「かしこき」例が成信(四納言の優秀さ)、「愚かなる」例が重家(人心の浮薄さ)となり、その対比を明白にするために先のような構成の整備を図ったと思われる。

直接、主題とは関わらないが、同様の例が巻六第70話「時光茂光

致寄及天聰事」に見られる。その冒頭を少し引用する。

「中比、市正時光と云ふ笙吹きありけり。茂光と云ふ篳篥師と開葺を打ちて、同じ声に裏頭楽を唱歌にしけるが、」

一方「今鏡」冒頭には、

「中頃、笙の笛の師にて、市佑時光と聞えしが、いづれの御時にか、内裏より召しけるに、同じ様に老いたる者と二人、葺打ちて、歌うたふ様に、」

とあり、「発心集」の傍線部分がない。しかし、「今鏡」の末尾には、

「用光といひし篳篥の師と二人、裏頭楽を唱歌にしけるとぞ、後に聞えける。」

とあり、「発心集」はこの末尾注記を冒頭に組み入れ、話のスタイルを整えたと思われる。

以上、簡略ながら説話の構成について検討を加えた。取り扱った関係説話において、「発心集」は「今鏡」に依拠しつつも、かなりの改変をし再構成を図っている。ある時は主題意識から、またある時は、説話としてのまとまりを重視する意識からなされているようである。

五、伝承説話の検討 (二)

—— 説話叙述について ——

「今鏡」からの伝承と思われる「発心集」の説話を典拠説話と比較すると、当然のことながら省筆と加筆の部分が見出せる。省筆の

場合、いわゆる叙述の簡略化として理解できるが、加筆の例は幾分複雑な様相を呈している。ここでは加筆部分を取り上げて、説話叙述の考察を行つてみたい。

「発心集」の加筆は、大きく分けて次の二種類と思われる。

(7) 話の展開における補足的叙述

(8) 話の主題に関わる改変的叙述

すべての例が、この二つに類別できるのではないが、「発心集」の説話受容のあり方を探る上で、この二種の叙述が重要な鍵をにぎっていると思われ、あえて限定してみた。

まず、(7)の補足的叙述であるが、具体例として第54話と「今鏡」所収の話とを比較・対比してみたい。

(発心集)

① 少納言統理と聞こえける人、年ごろ世を背かんと思ふ志深かりしが、月隈無かりける比、心をすましつゝ、つくぐと思ひ居たるに、

山ふかく住まん事の猶せちに覚えければ、先づ家に、

② 「泔設けせよ。

③ ものへ行かん」

④ と言ひて、髪洗ひ、けつりぼう

しなんどしけり。

⑤ 気色や知りたりけん、

(今鏡)

少納言統理と聞こえし人、年頃も世を背く心やありけむ。月の隈なく侍りけるに、心を澄まして、

山深く尋ね入らむ志の切に催しければ、まづ家に、

「泔設けよ。

出でむ」

といひて、頭洗ひて梳り乾しなどしけるを、

妻なりける人心得て、さめくとなむ泣きける。

⑥ されども、かたみにとかく云ふ事もなくて、

明る日うるはしき装ひにて、其の時の閑白の御もとに詣でけり。

△中

⑨ 「後の世には頼むぞ」

⑩ と言ひければ、涙を押しつゝ、数珠をば収めて、拜し奉りて、

出でにけり。

⑪ 僧賀聖の室に至りて、本意の如く頭おろしてけれど、つくぐと詠めがちにて、勤め行ふこともなし。

⑫ もの思へる様にて、常は涙ぐみつゝ居たりければ、聖の怪しみて、故を問ひけり。

妻なりける女も心得て、さめく泣き居りけれど、

記念としていふ事はなくて、

明る日麗しき装ひして、一の人の御許に詣でて、

略▽

「後の世は頼むぞ」

など侍りければ、数珠をば納めて、拜し奉りて、

増賀の聖の室に到りて、頭剃したりけれど、

勤め行ふ事もなくて、もの思ひたる姿なりければ、聖さる心にて、はしたなく侍りければ、

△以下略▽ (数字は文番号)

行文はほぼ同文的で酷似している。傍線部分が「発心集」のみに見られる叙述である。傍線部分A B D G Hは、いずれも統理の心理状態を表わした動作表現であり、類型的な叙述といえる。断片的な「今鏡」の叙述を補足したと見るべきであろう。Bも妻の心理を想像して補ったと解される。他の伝承説話にも同様の例があるので少

し紹介する。傍線部分が加筆である。

「国にて女病を受けて、つひにはかなく成りにければ、嘆き悲しむこと限りなし。取り捨つるわざもせず、口ごろふるまゝに、成り行くさまを見るに、いとさうき世のいとほしさ思ひ知られて、心を発したりけるなり。」(第16話)

「県召のところ、心のうちに、願を発して、もしよろしき因縁りなば、」(第53話)

また、傍線部分C Eは「今鏡」の長く続く文を終止させたために生じた加筆であろう。全体にわたり、だからと連続していく「今鏡」の文章に手を入れて、説話の文体に整えたと思える。第53話においても、前半一センテンスの「今鏡」の文章を五文に細かく分断しており、これらの加筆は「発心集」編者の文章(文体)意識の表れと考えたい。

次に(4)の主題に関わる改変的叙述であるが、その典型例として第16、70話を取り扱う。

(第16話)

頭おろして後、乞食し歩きけるに、

我が道心は実に発りたるやと、心見んと、

妻のもとへ行きて、ものを乞ひければ、女これを見て、

本話中最も異同の多い部分である。「今鏡」では、前妻との出会いが偶然のものであるか否か明白でない。これに対して「発心集」

(今鏡)

頭を剃して、都に上りて、物など乞ひ歩きけるに、

元の妻にてありける女、

△以下略▽

では①の叙述によって道心を試みるための定基の積極的行為であると看取できる。「発心集」本話は、定基の伝記的性格が濃いものの、中心は彼の道心譚であり、道心の堅持が主題として扱われている。その主題意識が、右のような叙述の改変、増幅を生んだと考えたい。

(第70話)

「いとあはれなる者どもかな。」

さほどに楽に愛で、何事も忘る、

ばかり思ふらんこそ、いとやんごとなけれ。

王位は口惜しきものなりけり。

行きてもえ聞かぬこと」

とて、涙ぐみ給へりければ、思ひ

のほかになむありける。

用光が参内を拒んでいる知らせを聞いて、帝が発したことばの部分である。②の叙述は「今鏡」に比べ、やや誇張的であるし、③の帝の泣く描写は、帝の数奇人に対する賞讃、羨望の気持を十分に具現したものである。本話の主眼は、数奇の精神の高揚にあったらしく、②③の改変的叙述も、それに基づいているといえよう。

他に第54話においては、統理出家時の「ほだし」の問題という主題で「今鏡」の叙述を書き改めた、とする御指摘もある。このように見てくると、主題意識によると思われる改変的叙述は多く、「今鏡」からの伝承における一方法と見ることもできよう。換言すれば、あまり主題性の強くない「今鏡」所収の道心譚や雲能譚を、仏教説

(今鏡)

「いと哀れなる事かな。」

唱歌しすまして、よろづ忘れたるにこそあむなれ。

帝の位こそくち惜しけれ。

さるめでたき事を行きても

え聞かぬ」

とぞ宣はせける。

話、教訓説話として成立させるために、以上の操作・方法が必要であつたのだらう。

六、おわりに

もとより「今鏡」は仏教説話集ではなく、その編纂を目的とした「発心集」との間に、異なりを見せるのは当然ともいえる。それゆえに、「発心集」編者にとって「今鏡」の話を仏教説話として定着させ、成立させることが重要な営為であつたらう。その営為・操作の跡を、わずかであるが追究してみた。その結果、「今鏡」からの受容は多大であり、説話集編纂の手引き書として「今鏡」を利用していたかのように思われた。また伝承説話においては、基本的に「今鏡」に依拠しながらも、構成・叙述を改変したり、他資料からの補充を行ない、独自の説話スタイルを形成させていた。その背後には、やはり話の主題による統一、整備の意識が働いていたと見るべきであらう。

本稿では触れ得なかつた異本「発心集」（五巻本）の問題^④、具体的には言及できなかった「無名抄」と「今鏡」との関係等については別稿を期したい。

注①山内益次郎氏「中世初期における今鏡本文の考察」（『岡一男博士頌寿記念論集平安朝文学研究—作家と作品—』昭46・3有精堂刊。）のち「日本文学研究資料叢書・歴史物語Ⅱ」に再録。

②藤島秀隆氏「『発心集』おける伝承—「今鏡」との関連をめぐって—」（『説話物語論集』第三号、昭50・3）

③「無名抄」第21、74、76話（校註鴨長明全集）が「今鏡」打開第十からの伝承と思われる。

④「発心集」成立論のうち、築瀬一雄博士は、巻六までを原型とする御所説を提出しておられる。詳細は「発心集研究序説」（『鴨長明の新研究』昭13・4）を参照されたい。

⑤広田哲通氏「発心集の説話配列」（『女子大文学』27、昭51・3）氏は「五二話から五三話への因縁譚としての連続を重視したための意識的変更である」と考えておられる。

⑥「宝物集」はこの定俊の話を改変して、前世の盲目聖が「只當國ノ国司ト成ント云願」（七巻本）を立てたから国司に転生できたとしている。定俊蔑視については「下劣ノ者ナリシ故ニ」という理由を施している。

⑦注(2)と同じ。

⑧この問題については、広田哲通氏「愛することと往生をとげること」（『女子大文学』28、昭52・3）に詳細な検討が見られる。

⑨「今鏡」もほぼ同文で、「心は偏に仏の道に深く染みて、僻びの心のみありければ」とある。

⑩「今昔」はⅢⅣの語柄が逆順である。

⑪山本一氏「貴族道心譚から見た『発心集』」（『日本文学』25—12、昭51・12）

⑫「今鏡」との関係説話のうち、第15、16、57話を除いた六話が異本にない。（『本学大学院文学研究科』）